

韓国語学習者の自律学習を促すアカデミックポートフォリオの構築に向けて －学習目標と評価を明確にした自律学習支援－

林 炫情・金 恵媛

1. はじめに

山口県立大学国際文化学部では、本学における教育理念、「個性豊かな地域文化の進展に資する教授研究」のもと、「国際的視点を持ち、地域の諸課題に対応できる教養及び技能を備え、地域の国際化、個性豊かな地域文化の振興と創造に資する人材育成」を目指している。とりわけ、国際文化学科の教育特徴は、多文化的視点からの文化理解力の養成、実践的な外国語（英語・中国語・韓国語）運用能力の育成、国内外における実習体験や国外への留学経験を通じての行動力の育成である。国際文化学科では、学生の関心領域や将来の進路によって、2年次より選択する2つの履修モデル（国際文化系、言語コミュニケーション系）を設定しているが、それぞれに到達目標が異なる。実践的な外国語能力をより高いレベルに伸ばしたい場合は言語コミュニケーション系を、国際的な行動力に重点を置きたい場合は国際文化系を勧めている。特に英語を専攻する学生は、全員がTOEICの得点が650点以上を、また中国語・韓国語を専攻する学生は各種検定において中級レベル以上の合格を目標としている。しかし、韓国語の場合、大学に入って初めて学ぶ学生がほとんどで、明確な目標をもって学習するよりは大学が提供する教養科目の一つとして何となく選択する機会が少なく、韓国語能力向上のための自律的学習態度を身につけるまでには至っていないのが現状である。

そこで韓国語コースでは、韓国語学習者の韓国語や韓国文化・社会に関する学び（以下、韓国学）の学習目標と評価を明確にした自律学習支援の取組みの一環として、授業のなかで達成目標の自己評価を行うとともに、学習記録の媒体を提供し、コミュニケーション能力の評価や学習課程の省察の自己評価などの学習過程を可視化する試みを行った。本稿は、韓国学を学ぶ学生の専門的なアカデミックスキルの習得を担う「基礎演習」科目における取組みとその成果について報告するものである。

2. 韓国語コースにおける自律学習支援

韓国語コースの基礎演習は、韓国学を学ぶ大学生のための専門的なアカデミックスキルを修得することを目標としていることから、これまで(1)学習してきた韓国語を積極的に使う、(2)韓国語や韓国文化・社会を題材にした発表やレジュメやレポート作成など、知的活動のために必要なアカデミックスキルを身につける、(3)友人や教員との円滑はコミュニケーションのためのスキルを、グループワークによって身につける、そして(4)授業活動や振り返りを通して学んだ学びを、これからの韓国学学習へ継続的につなげることを目指した授業を行ってきた。しかし、教師主導に慣れた受身の学習者が多く、また受動的な学習になれた学習者の多くは、それぞれの活動においても自ら具体的な目標設定や評価ができないといった課題があった。しかし、受身の学習では高い学習効果は期待出来ない。

そこで平成23年度は、特に学生の自主的な活動への取り組みを促し、その後の継続学習を奨励することを目的に、授業目標と評価を明確にした自律学習支援（自主的に学ぶ機会を作る）、そのためのポートフォリオの活用重点をおいて取り組んだ。取組みの内容としては、学生自らが自分自身の韓国語学習の背景や目標を設定し評価する。また、韓国学のための文献検索、文献解題、発表資料作成、プレゼンテーション、レポート作成などの基礎的技術を身につけることを軸として、韓国語や韓国文化・社会を学び、その学習課程で作成した課題を記録・保存し、3年次以降の韓国学への継続学習につなげることを目指した。目標設定と活動内容の評価については、can do目標を使って学習目標を明確にするとともに、それぞれの授業活動の課題の遂行が最終的にどのアカデミックスタディスキルに繋がるかを学習者自らがチェックできるようにした。

以下では、平成23年度の韓国語コースのアカデミックスキルの向上を目指した「基礎演習Ⅰ」の授業概要（履修生11名）及び韓国語学習者の自律学習支援を目的とした韓国学アカデミックポートフォリオ（Korean studies Academic Portfolio: KAP）について報告する。

3. アカデミックスタディスキルの向上を目指した学習目標と評価

アカデミックスキルとは、大学で主体的、能動的に学ぶために必要とされている技能を指す（佐藤他, 2010）。具体的には、「聞く（メモ・ノートテイキング技法、質問術）」「読む（読書法）」「調べる・整理する（図書館利用法、図書館活用法、資料・文献の探し方、情報収集法、情報整理法、アイデア発散・収束法）」「まとめる・書く（レポート作成法、レジュメ作成法）」「表現する・伝える（自己表現法、プレゼンテーション技法、話し合いの技法、ディスカッション技法）」「考える（グループワーク技法、批判的思考力）」「覚える（記憶力・テスト勉強法）」「時間を管理する（時間管理法）」などがあげられる。さらに能動的学習を成功させるためには、人間関係を円滑に進めて行くためのソーシャルスキルが必要である。ソーシャルスキルとは、他のメンバーと協力し合いながら共通の目標を達成するために、相手の立場を思いやり、チームの中で自分の果たすべき役割を考え、責任ある行動をするスキル（佐藤他, 2010）を指す。このような大学で主体的、能動的に学ぶために必要な技能であるアカデミックスキルとソーシャルスキルは、強いては社会人基礎力につながる大事なスキルといえる。

平成23年度の韓国語コースの基礎演習Ⅰでは、大きく「大学4年間の自分史作成」、「ディベート」、「テーマ発表（調べ学習）」の活動を行いながら、学生が一人またはグループでそれぞれの課題を遂行することによって、アカデミックスタディスキルが習得できるよう設定した。また、各活動においては、「学習目標確認と自己評価チェック」リストを事前に確認し、活動内容の意図と can do の到達目標について全員で共有する。そして、活動終了後は参加者全員がそれぞれの活動を振り返って自己評価ができるようにした。全15回分の授業内容とそれに対応するアカデミックスタディスキル例は、表1に示したとおりである。

表1 平成23年度・韓国語コースの基礎演習Ⅰ（前期）のスケジュール（前5回）

	授業形態	授業内容	対応するアカデミックスタディスキル(例)
第1回	講義(オリエンテーション)、グループワーク	授業内容の理解、人間関係構築(横と縦のつながり)	人間関係の構築、目標の設定
第2回	講義、演習	自分史作成	レポート作成力、自己認識、キャリアの発見
第3回	グループワーク	自分史の発表。 ディベートのための情報収集、 整理、プレゼンテーション準備	資料収集力、資料解釈力、論理性、発表力、チームワーク力
第4回			
第5回	発表、ディスカッション	ディベート	
第6回	講義、演習	ディベート振り返り、学習の振り返り	コミュニケーション力、整理力、計画力、学びの応用と発展力
第7回	グループワーク (チュートリアル形式)注2	テーマ発表のためのブレインストーミング	アイデア発散力、情報整理力(収束力)、表現力、状況把握力
第8回		ブレインストーミングの振り返り、学習の振り返り	コミュニケーション力、整理力、計画力、学びの応用と発展力
第9回	講義、演習	レジュメ、パワーポイント作成、 プレゼンテーション(評価シート確認)	
第10回	グループワーク	テーマ発表のためのポスター作成	表現力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力、グループワーク力
第11回			
第12回		パワーポイント作成	
第13回		発表リハーサル	
第14回	発表会	プレゼンテーション	
第15回	グループワーク、講義	発表会の振り返り、 全体のまとめ	コミュニケーション力、学びの応用と発展力

注1. アカデミックスタディスキルは、『大学教員のための授業方法とデザイン』（佐藤他, 2010）を参考にした。

注2. グループ学習・討論が円滑に進むように、少人数に分かれたグループに対して、韓国の留学経験のある4年生を学習の援助者として配置した。

3.1 授業活動の学習目標と自己評価

(1) 大学4年間の自分史作成

今までの、そしてこれからの大学生活や韓国語学習の目標を明確にするために、大学卒業時の自分の姿をイメージした自分史作りを行った。また、学年ごとの目標や様子を一つの絵で表現してもらった。専門領域（フィールド）が決まった時点で、1年次の学生生活を含め、頭の中で考えていたこれから希望する大学生活を、文章や絵で目に見える形にまとめてみることで、現在の自分を見つめ直し、今後の学生生活を前向きに過ごすために何が必要か、そして韓国語学習との関連づけなどを学生自身に改めて考えさせるのが狙いである。しかし、今まで受身な学習になれてきた学生にとって、未知の3年間のイメージするのはそんなに容易なことではない。そこで、授業では、より具体的で実現可能な4年間の大学生活がイメージできるように、4年生に今までの自分の大学生活を振り返っての自分史を紹介してもらう機会も設けた。

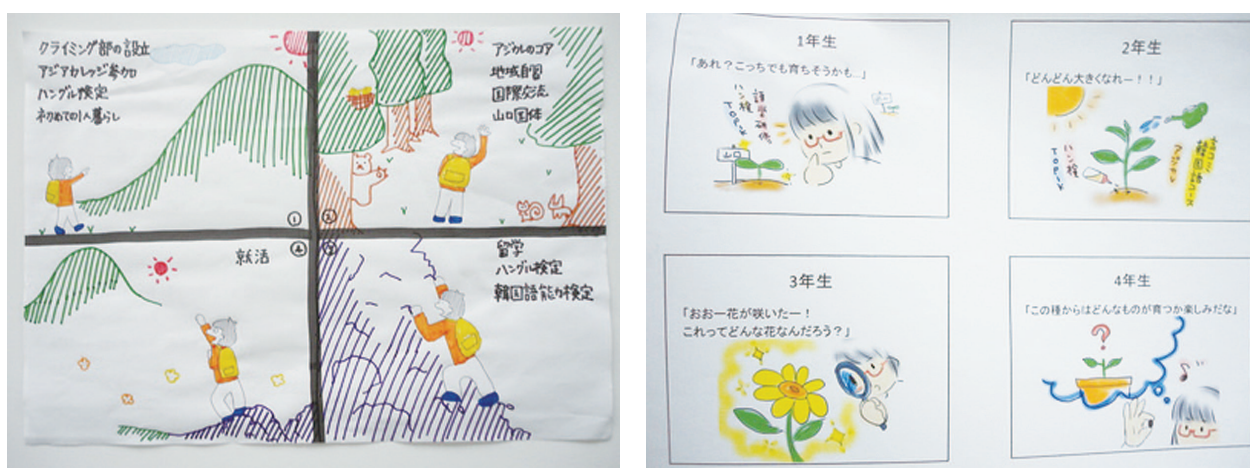


図1 自分史のイラスト例

自分史作成における具体的な学習目標は、①「自分自身を見つめ直すことができた」、②「大学生活のなかでの自分の目標を明確に確認することができた」、③「大学4年間の振り返りとして、自分史を作成してみることで、今後の学生生活を前向きに考えることができた」の3項目を設定した。そして授業活動終了後に、それぞれの can do の到達目標に対して、「1:全くそう思わない」「2:そう思わない」「3:どちらともいえない」「4:そう思う」「5:非常にそう思う」の5段階尺度の5点満点で自己評価してもらった（以下同様）。

その結果、各項目の平均値は「自分自身を見つめ直すことができた」が4.1点、「大学生活のなかでの自分の目標を明確に認識することができた」が3.9点、「自分史を作成してみることで、今後の学生生活を前向きに考えることができた」が4.2点であった。また、その他の気づきとして、「他人のものと比較して、私の考えた自分史には足りないもの（乗り越えるべき壁の存在）があることに気付いた」「他人の自分史を見ることで、「自分もあの人みたいになりたい」と思ったり、「こういうやり方もあるのだな」と気づくことがあったりと、良い刺激になった」「留学した先輩の発表を聞いて、大学5年生を過ごすという私にとっては新たな選択を知るようになった」などの意見がみられた。

表2 大学4年間の自分史作成の評価

自分史作成活動の到達目標	アカデミックスキルの例	自己評価 (平均点)
自分自身を見つめ直すことができた。	レポート作成能力	4.1
大学生活のなかでの自分の目標を明確に認識することができた。	レポート作成能力	3.9
大学4年間の振り返りとして、自分史を作成してみることで、今後の学生生活を前向きに考えることができた。	レポート作成能力	4.2

注: 評価基準: 1=まったくそう思わない 2=そう思わない 3=どちらともいえない 4=そう思う 5=非常にそう思う

(2)ディベート

学生の客観的で複眼的な視点の養成、そして人前で自らの意見を論理的に話すことを意識させるといった能動的学習の方法としてディベートは有効である。ディベートのテーマは、学生に韓国についての興味のある内容について複数のテーマをリストアップしてもらい、その中から選択させた。最終的に残ったテーマは「韓国の徴兵制は希望制にするべきだ」であった。発表日までは2週間をあけておき、討議のテーマに関して、資料を収集し、発表内容をまとめて、練習しておくことを課題として与えた。

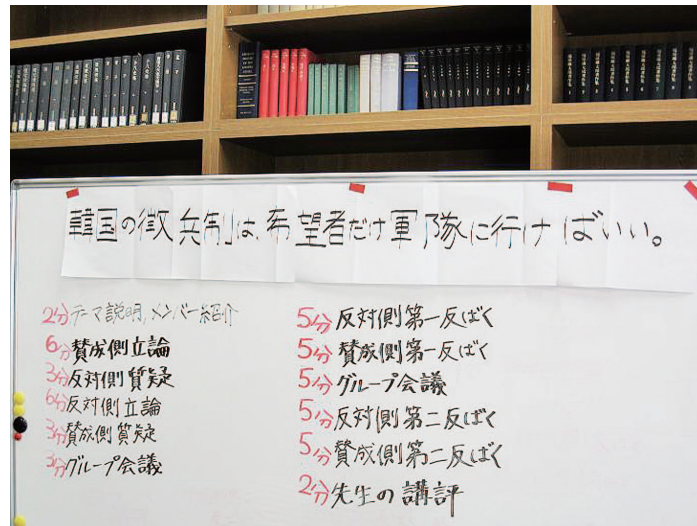


図2 ディベートのテーマと進行方法

ディベート活動そのものは1回のみで簡易的なものではあったが、参加したほとんどの学生から「情報収集の大切さや時間配分・時間管理の重要性、チームワークの大切さを感じるようになった」、「感情的でなく論理的な話し方について意識するようになった」など、肯定的で有意義なフィードバックを得ることができた。

一方、Can-do到達目標に対する自己評価の結果は表3に示したとおりである。具体的にみると、授業活動を通して①「客観的・批判的・複眼的な視点の重要性について考えることができた」は4.5点、②「他人の意見を正確に聞き、自分の意見を考えとおりに話すことができた」は3.3点、③「テーマに関する情報収集ができ、またその情報を自分の立場(賛成・反対・司会)から論理的に整理することができた」は3.3点、④「グループワークなかでの話し合いに積極的に参加し、話し合いが楽しくなるように場を盛り上げることができた」は4.1点であった。全体的に資料を収集したり立論を立てたりしたことは全員が今後の学習に役に立つと評価しつつも、②と③の項目が比較的に低く、情報収集やプレゼンテーションに関する能力においては少し課題を残す結果となった。これは、準備時間が十分ではなかったことにもその理由があると思われる。

表3 ディベート活動の評価

ディベート活動の到達目	アカデミックスキルの例	自己評価(平均点)
客観的・批判的・複眼的な視点の重要性について考えることができた。	コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力	4.5
他人の意見を正確に聞き、自分の意見を考え通りに話すことができた。	コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力・発表能力	3.3
テーマに関する情報収集ができ、またその情報を自分の立場(賛成・反対・司会)から論理的に整理することができた。	情報収集能力・情報解釈能力	3.3
グループワークなかでの話し合いに積極的に参加し、話し合いが楽しくなるように場を盛り上げることができた。	チームワーク能力・コミュニケーション能力	4.1

注:評価基準:1=まったくそう思わない 2=そう思わない 3=どちらともいえない 4=そう思う 5=非常にそう思う

(3)テーマ発表

テーマ発表活動では、学生のアイデア発散力と情報収集力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力、学びの応用と発展力などの向上を意識させることが狙いである。活動内容としては、日本人と韓国人の一生を比較することをテーマに、グループワーク活動を重ねながらプレゼンテーションに向けての資料収集、ポスター作成、発表原稿作成を行った。プレゼンテーションまでの一連の準備活動を通しての気づきとして、「日韓の比較ということで、韓国だけでなく、日本についても知ることができた」「チームワークの大切さ（役割分担・意見交換・協力）を学んだ」「資料作成の大切さ（パワーポイント作成、パネル・配付資料など）」「余裕をもって準備することの大切さ」などがあげられた。

具体的な到達目標についての自己評価の結果は表4に示したとおりである。①「効果的なプレゼンを行うためには何が必要なのかを意識するようになった」は4.5点、②「調べたい内容をテレビや日常生活を通して、観察、注目するようになった」は4.0点、③「今回の活動で学んだことを他の授業の発表にも積極的に応用してみたいと思った」は4.7点であった。学習目標の達成は全ての項目で肯定的に評価しているようであるが、とりわけ学びの応用と発展力は自律学習に繋がる重要なポイントであるだけに、今回のプレゼンテーション活動によって学んだことを他の授業で応用してみたいという意見が多かったのは大変嬉しい結果である。

表4 テーマ発表活動の評価

到達目標	アカデミックスキルの例	自己評価 (平均点)
効果的なプレゼンを行うためには何が必要なのかを意識するようになった。	アイデア発散力・表現力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・グループワーク力	4.5
調べたい内容をテレビや日常生活を通して、観察、注目するようになった。	プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・グループワーク力	4.0
今回の活動で学んだことを他の授業の発表にも積極的に応用してみたいと思った。	アイデア発散力・学びの応用と発展力	4.7

注 評価基準: 1=まったくそう思わない 2=そう思わない 3=どちらともいえない 4=そう思う 5=非常にそう思う

授業の過程で制作した日本人と韓国人の一生を比較したポスターは、2011年7月17日に開催された本学のオープンキャンパスにおいて韓国語コース2年生の活動として展示し、紹介を行うことができた。国際文化学部は人材育成のキーワードの一つに発信力があげられていることから、今回の取組が授業内の枠を越え、学内外に情報の発信ができたことはかなり評価できる点であろう。



図3 オープンキャンパスでの様子

3.2 アカデミックスタディスキルの総合評価

基礎演習での活動は、総合的に判断して学生のアカデミックスタディスキルを向上させるうえでどの位有効であったのか、授業での効果をはかってみるために、学生には授業途中と授業終了後の2回に分けて、レーダーチャートを用いて、自分自身のアカデミックスタディスキルについての自己評価をしてもらった。レーダーチャートでは、「聞く」「読む」「調べる・調整する」「まとめる・書く」「表現する・伝える」「考える」「覚える」「時間を管理する」といった8項目のスキルを設定し、[0:全くできない]から[5:非常にできる]まで6段階で評価してもらった。その結果、ほとんどの学生が全ての項目において、授業開始直後より授業後にアカデミックスタディスキルが向上したと判断していることがわかった。項目によっては2ポイント近く上がっている学生もみられた。つまり、この結果は本授業での活動内容が一般的に学習者のアカデミックスタディスキルを向上させるうえで効果的であったといえよう。

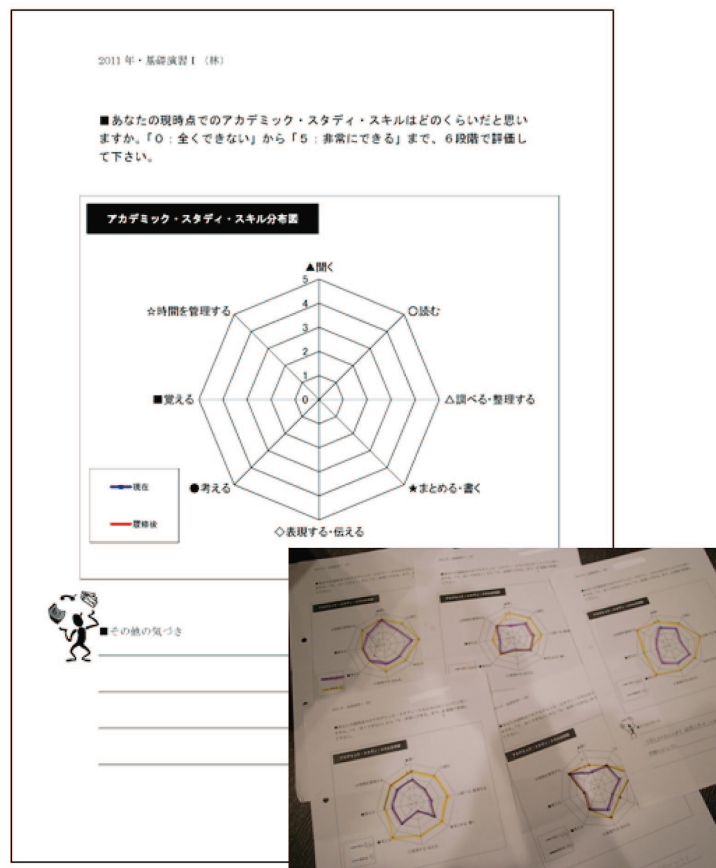


図4 アカデミックスタディスキル分布図

4. 韓国学アカデミックポートフォリオ (Korean studies Academic Portfolio : KAP)

韓国学アカデミックポートフォリオは、韓国語や韓国文化・社会を専門として学ぶ学習者のための韓国学の学習の進歩と学習の成果の記録である。韓国語コースの学生が韓国学アカデミックポートフォリオを有効に活用し、それによって学習者の活動への主体的な関わりと、教師の効果的な関わり方を促せることを目的とする。韓国学アカデミックポートフォリオの内容は、韓国語コミュニケーション能力などの運用能力評価とアカデミックスキルの自己評価を学習評価に組み入れて、(1)学習目標や学習内容の記録、(2)言語文化的体験の記録、(3)学習課程で作成した課題の保存、の3部構成となっている。ポートフォリオの韓国語に関連した can do 目標設定および内容構成は、「言語のためのヨーロッパ共通参照枠：学習、教育、評価 (Common European Framework of Reference for Languages; Learning, teaching, assessment、以下CEFR)」とJF日本語教育スタンダードを参考に作成した。ただし、言語 can do の詳細については別の機会に述べることとし、本稿では省略する。

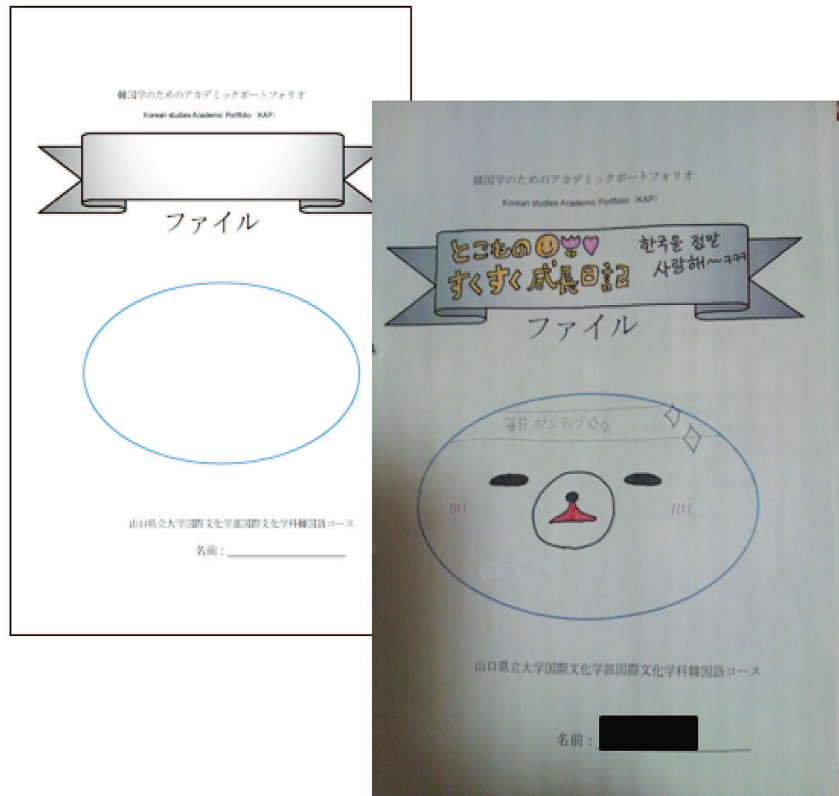


図5 韓国語学のためのアカデミックポートフォリオ表紙（例）

4.1 学習目標や学習内容の記録

(1) 自己目標設定・自己評価

韓国語学習における目標設定や自己評価について、具体的に記述ができない学生が少なくなく、それぞれの目標に対して、「単純に韓国語が上手になりたい」「検定試験を頑張る」といった漠然とした記述や、評価項目においても単純にできたかどうかの記述にとどまってしまう場合が多かった。しかし、学生が主体的に韓国語と韓国文化・社会について学んでいくためには、単に目標を書かせるのではなく、自身の目標を意識し、内省する時間や仕掛けを作ってあげることが必要である。

そこで、学生が韓国語の学習の目標が具体的にイメージでき、どうしてその目標を立てたのか、そのために何をしようと思うのか、目標はどうやって達成したのかななどを、教師やクラスメートと話し合いを重ねながら、韓国語未来マップ、自己目標の設定と自己評価に記録することによって内省活動を深めさせる自律学習支援を目指した。

(2) 毎回授業ごとのシャトルカード

授業に対する学生の反応や理解度を確認するとともに、学生自らが学習を自主的に管理する習慣づけを行うために、岡山大学教育開発センター FD 委員会が作成したシャトルカードを導入した (<http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/fd/tc/2005/>)。シャトルカードは授業毎に学生にコメント（発見、疑問、質問、感想、その他何でも教員へのメッセージ）

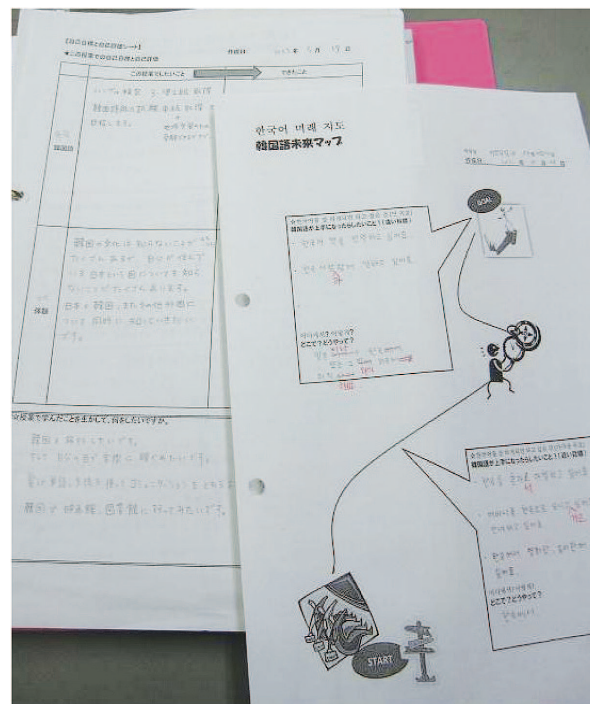


図6 韓国語未来マップ及び自己目標と自己評価シート

教師がまたそれについてのコメントを書いてもらい次回の授業で返却するという仕組みである。シャトルカードは学生の主体的な授業参加を促すだけでなく、学生と教師、双方向の連絡ツールとしても利用できる。また、学期末には15回分の授業内容と感想などが一目で確認できるので、次年度の授業設計のフィードバックにもかなり有効であると考ええる。

4.2 言語文化的体験の記録

毎週ごとに、韓国語と韓国文化体験と学習シートを作成することを通して、学習者が意識しなければ通り過ぎてしまう韓国語や韓国文化体験を振り返り、内省を促すようにした。言語文化的体験の記録の内容は、①「韓国語と韓国語の使い方について、気付いたこと、考えたこと」、②「文化・社会（韓国文化やその他の文化）について、驚いたこと・戸惑ったこと・面白いと思ったこと・気付いたこと」、③「言語（韓国語）の学び方について、気付いたこと・発見したこと」、④「同じく韓国語を学んでいる人に伝えたいこと・したいこと」の4項目をそれぞれ記入するもので、提出された記録シートについては、教師がコメントをして次の授業で返却する仕組みをとった。

授業アンケートの結果、毎回の言語的・文化的体験記録が韓国語学習に役立ったかどうかについて、5点満点のうち4.09と、全体的に役に立ったと判断していた。役に立つ理由としては、「韓国語で書く練習になった」、「頑張って韓国語で書いていたので作文の練習になった」、「毎回添削してもらって本当にありがたかった」、「普段のそぼくな疑問や思っていることを知ることができ、またそこから派生する疑問ができてきたりして、面白かった」、「韓国の文化を調べる一つのきっかけとなった」、「勉強方法など、みんなのやり方を知ることができた」、「ニュースやテレビを意識して見るようになった」などがあげられた。

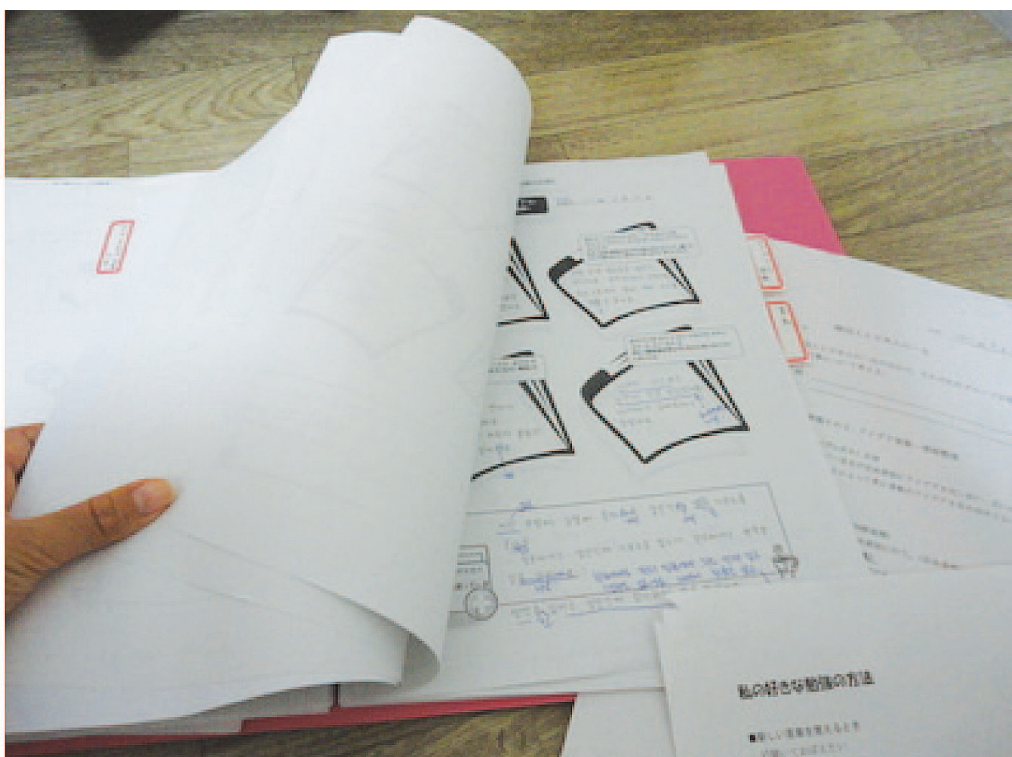


図7 言語的文化的体験の記録

4.3 学習課程で作成した課題の保存

学習過程での成果物については学習者が自分自身で取捨選択しながら学習の成果をファイリングしていく方法をとった。ポートフォリオにどんなものを入れたかというアンケート調査では、韓国語の日記、単語練習、授業の配布プリント、グループワークで集めた資料、プレゼンテーション評価表、ブログの印刷、韓国の文化や歴史について調べた資料、振り返りシートなどを入れていることが分かった。下記では、グループワーク振り返りシートとブログについて簡単に述べる。

(1)グループワーク振り返りシート

基礎演習では、授業活動のなかでできるだけ学生参加型のグループワークをたくさん盛り込むことによって、学生間、そして学生と教員間の円滑なコミュニケーションのための能力が定着できるように試みた。そして、グループワーク後は、「振り返りシート」を導入し、学生の学習過程の省察を促した。グループワーク振り返りシートの内容は、①「グループワークから、あなたが学んだ教訓は何ですか」、②「グループワークを通して、自分自身について気付いたこと、発見したことは何ですか」、③「グループメンバーについてきづいたこと、発見したことは何ですか」などとなっている。

(2)授業の振り返りとしてのブログ作成

授業目標と理解、そして評価を共有することを目的に、受講者が順番に毎回の活動内容をブログにアップするようにした。(http://imuzemi.exblog.jp/14326434/)。ブログ作成に関する授業アンケート結果をみると、平均が4.55点と高く、全体的に役に立ったと感じているようである。その理由としては、「ブログに書くことで忘れた内容もブログでチェックできる」「他のグループメンバーがどんな気持ちでこの活動をしているのかの理解にも繋がったと思う」「文章化することで何をやったか、改めて復習することができた」「何をしたかをまとめることで、次何をすればいいかが明確になった」などがあげられた。ブログ作成は、学生達が自分の学習の進め方を主体的に考えるメタ学習のきっかけとなったようである。

5. 終わりに

土持(2010)では、学生の能動的学習を促す授業改善への手引きとして、名古屋大学高等教育研究センターの「ティップス先生からの7つの提案」は有益であると紹介している。とりわけ、「ティップス先生からの7つの提案」の教員編では、「提案1:学生と接する機会を増やす」、「提案2:学生間で協力して学習させる」、「提案3:学生を主体的に学習させる」、「提案4:学習の進み具合を振り返らせる」、「提案5:学習に要する時間を大切にする」、「提案6:学生に高い期待を寄せる」、「提案7:学生の多様性を尊重する」などがあげられている。

本取り組みは、韓国語学習者の学習目標と評価を明確にした自律学習支援の取り組みの一環として試みたものであるが、授業改善方法においては上記の7つを強く意識したものとなっている。学期の終わりに実施した学生による授業満足度はかなり高いものであったことから(5点満点中4.7)、その有効性が認められた。

最後に、平成23年度韓国語コースの基礎演習(1)の取り組みに関する総合評価として、基礎演習を通して学んだことを、『これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしたいと思いますか』に対する学生の答えを紹介しておく。

- 私は今回学んだ自分の意志を相手に伝える大切さとグループでやることのおもしろさと重要さを今後の卒論を書く時、また留学(いけたら)行くときの助けとして生かします。
- 私は今回学んだパワーポイントを使ったプレゼンの方法を卒論や、これからの授業で生かします。
- 私は今回学んだ時間管理の大切さを今後の学生生活を有意義に過ごすために生かしていきたいと思います。時間がもっと欲しいと思っても時間は限られています。その限られた時間を有効に使うためにも時間配分をまず考えてみるのが重要です。
- 私は、今回学んだチームワーク力を、今後の学生、将来の生活で生かしたいと思う。まわりの人と関わることの大切さを知ったので、その中でどう「自分」という存在を最大限生かせるか、ということを常に問い続け、精進したい。
- 私は今回学んだ協力する大切さをこれからの話し合いなどで生かします。
- 私は今回学んだ目標を立てて、道すじを考えるとというやり方を勉強面だけでなく、生活や就職に生かします。
- 今の韓国ブームでいろいろな悪い嘘が飛び交っている中で、自分が知っていることを間違った人に伝えられると思う。

- 私は今回学んだ積極性をやる気と変えて韓国にもっとふれていき、将来の仕事に生かしたいです。
- 私は今回学んだ協力性をこれからの生活において国際文化学科で学んでいる学生として相手が誰であろうと協力して生かしていきます。
- ディベートで学んだ、事前準備の大切さ(知識等)を普段からの生活に生かします。→ 無知だと自分の意見さえ持てない。就職活動や卒論のことも頭に入れて、色々なニュースを見て知るべき。
- 私は今回学んだ積極性を授業での発言や今後の日常生活に積極的な活動を行う事で生かします。

上記の学生のコメントからも、本取組みは韓国語学習者の自律学習を促すのに一定の効果があったと評価できる。しかし、韓国語能力向上やアカデミックスキルの定着のためには、持続的で実質的な学習が必要である。今後は後期に開講されている基礎演習Ⅱの取組みと合わせて、韓国語コースにおける基礎演習の学習成果と課題を再検討し、学習者自身の再内省を促すより有効な学習サイクルの提示を模索していく。また、ポートフォリオの活用においても個々の課題遂行能力レベルの評価、そして継続的に学習過程を評価するためにはどのような活用方法が有効かを引き続き検討していきたい。

参考文献

- 岡山大学教育開発センター FD 委員会 (2005) 『ティーチングチップス集』 岡山大学教育開発センター
(<http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/fd/tc/2005/>) (2011年12月15日最終アクセス)
- 国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード 2010』 行政独立法人国際交流基金
- 国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』 行政独立法人国際交流基金
([http://jfsstandard.jp/pdf/jfs2010ug_all.pdf#search=JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック](http://jfsstandard.jp/pdf/jfs2010ug_all.pdf#search=JF%20日本語教育スタンダード%202010%20利用者ガイドブック)) (2011年12月15日最終アクセス)
- 佐藤浩章編 (2010) 『大学教員のための授業方法とデザイン』 玉川大学出版部
- 土持ゲラリー法一 (2007) 『ティーチング・ポートフォリオ-授業改善の秘訣』 東信堂
- ノエル・エンドウィスル (2010) 山口栄一 (訳) 『学生野理解を重視する大学授業』 玉川大学出版部
- マリア・ガブリエラ・シュミット他編 (2010) 『日本と諸外国の言語教育における Can-do 評価-ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の適用』 朝日出版社
- ヨーロッパ評議会 (2004) 吉島茂・大橋里枝他 (訳・編) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment』 朝日出版社
- 유럽평의회편 (2007) 김한란 외 (역) 『언어, 학습, 교수, 평가를 위한 유럽공통참고기준 한국 문화사』